

カラカス日本人学校における日本人社会との連携

前カラカス日本人学校 教諭

兵庫県西宮市立西宮浜小学校 教諭 来 栖 守

キーワード：日本人社会，運動会，修学旅行，JICA隊員

1. はじめに

カラカス日本人学校は、近年の経済状況により、児童生徒数が10名前後で推移している。そんな中、幸いにも校長を含む派遣教員5名と数名の現地スタッフで学校を運営でき、日々よりよい学校教育を追求し実践してきた。しかし、それは決して学校だけで行えた訳ではない。本レポートでは、現地の日本人（日系人を含む）に支えていただきながら学校教育を充実させることができた実践例を紹介する。

2. 日本人社会に支えられた学校教育

学校のいろいろな活動は、現地の日本人の支援があってこそ充実して行えたものであるが、ここではその主な活動をあげる。

(1) 運動会

カラカス日本人学校は、現在の児童生徒数とは対照的に広い運動場を持っている。一方、学年構成といえは1名の学年もあれば、欠学年もある。そんな状況で行われる運動会というと、小規模な会と思われるだろうが、毎年300名以上の参加者で盛り上がる一大イベントである。

運動会を行うにあたり、在ベネズエラ日本国大使館をはじめ、駐在員で構成される団体、そしてわれわれ教員や現地に長期に滞在している日本人、日系人で構成される日本人会に協力を求める。その日本人社会のネットワークで、運動会当日には多くの日本人や関係する多くのベネズエラ人が参集する。

児童生徒の競技・演技の間に、それらの日本人、ベネズエラ人が参加する競技があり、その中でも特に、チーム対抗のリレーや綱引きなどは盛り上がる。人数のことだけでなく、この運動会は多くの日本人やベネズエラ人に日本人学校での取り組みを知っていただける機会ともなっている。演技では、ヨサコイやソーラン節、大漁唄いこみなど日本の伝統的な踊りを披露し、日本の文化を紹介してきた。2011年の西日本大震災の時には福島県の相馬盆踊りを参加者全員で踊った。このように、多くの日本人の協力により、年に一度の運動会は児童生徒にとっても、そして、運動会に参加した全ての人にとっても思い出となる行事になっている。



カラカス日本人学校校舎

(中学生の作文より抜粋)

練習で頑張った応援合戦は、スペイン語はまあまあしっかり言えて、ベネズエラの方も理解してくれて、かなり盛り上がった。見ず知らずのベネズエラ人とも心がひとつになって、すごく気持ちがよかった。日本でもこういう国際交流はしたいと思う。

(2) 修学旅行

どこの国でも修学旅行の行き先については十分な検討を必要とするが、ベネズエラでは、特に治安上の理由で、修学旅行の行き先の選定や旅程については頭を悩ませた。しかし、そこでも大きな力になってくれたのが現地の日本人の力である。私が派遣一年目の時には、世界的に有名なグリダム見学を行うにあたり、現地でダム建設・管理を行っていた建設会社の日本人に協力を求めた。目的地は首都カラカスから離れた地方都市にあり、私には現地状況は全く分からない状態であったが、その日本人の方のおかげで現地の安全状況など多くの情報を得ることができた。また、下見にあたっては現地で広いネットワークをもつ日本人にも連絡をとり、効率よく下見を行うことができた。グリダムは、発電施設ということで政府の重要な施設であるため見学が容易ではないが、当日はグリダムをはじめ建設中のダム工事現場などを見学することができた。

カラカス日本人学校の修学旅行の目的の一つに、「世界で活躍する日本人と会う」ということがある。これまでにベネズエラ国内にある日系の会社や工場を見学させていただき、そこで活躍されている日本人の仕事ぶりを見せてもらうなど、日本人のネットワークのおかげで充実した修学旅行を行うことができた。

また、修学旅行前には、目的地の駐在員に日本人学校に来ていただき、事前に仕事内容を教えてもらうなどの進路学習会も行った。

(3) JICA 隊員との交流会

私たち教員は、児童生徒に多くの頑張っている日本人との出会いをさせたいと考えていた。時に、ベネズエラで試合を行うために訪れた日本のスポーツ選手に来校していただいたり、現地で音楽活動をしている日本人に学校でミニコンサートを開いていただいたりするなど、いろいろな形で日本人との出会いをアレンジしてきた。

その中でも、毎年行っている行事に JICA 隊員との交流会がある。ベネズエラ国内には、約 20 名近くの JICA 関係者がおられる。その方達に学校に来ていただいて交流を行っている。

交流内容は、隊員さんからベネズエラ各地での活動（農業分野、保育分野、医療分野、コンピュータ分野など）を紹介してもらう。あまりカラカス以外の街や村を知らない児童生徒にとって、隊員さんの仕事や生活の話は新鮮であり、上の学年にとっては進路学習としても役立っている。

活動紹介の後は、児童生徒が一番楽しみにしている遊び・スポーツ交流である。日ごろは少人数の日本人学校も、この日は若い隊員さんたちとにぎやかに遊び、力一杯運動する場面となっている。

カラカスでは限られた日本人としか知り合えない児童生徒ではあるが、日本人社会の温かい協力により彼らの学校生活はより豊かになっている。



JICA 隊員さんの活動報告

(4) その他の行事

このような運動会、修学旅行、交流会だけでなく、学校で行う行事、PTA バザーや餅つき大会などにも現地の日本人は積極的に参加し行事を盛り上げてくださった。

日本大使館には、カラカス日本人学校の伝統であるカラカス太鼓（和太鼓）を公共の場で発表する機会を毎年いただいている。おかげ様で、その発表にむけて児童生徒は毎週の太鼓の練習に励むことができています。そして、同時に児童生徒は日本の和太鼓の素晴らしさをベネズエラの人に伝える一助となることができています。

以上のように、少人数のカラカス日本人学校ではあるが、経済的にも活動的にも多くの日本人に支えられ、カラカスで暮らす児童生徒の学校生活はより素晴らしいものとなった。

3. 日本人学校教員に求められるもの

現地の日本人社会に支えられている日本人学校であるが、一方で日本人社会から日本人学校、日本人学校教員に求められるものもある。それは、現地の日本人の拠点として学校の存在感を高めることである。

その一つに、日本語指導がある。カラカスには、日本人会が開いている日本語教室がある。そこには、ベネズエラに長期滞在している日本人の子弟や、日系人、ベネズエラ人が通級している。日ごろは、日本人会に所属する人が指導をしているが、日本人学校教員も年に数回指導を行う。近年は作文指導などを行い、指導した生徒にはカラカス日本人学校で行う学習発表会に参加してスピーチをしてもらうなど、児童生徒との交流にも活かしている。

そのほかに、カラカス日本人学校では、これまで児童生徒を含む現地に住む日本人に対して、スペイン語検定、英語検定を実施してきた。日本人会主催の植林活動に参加したり、公の場で行われる日本文化週間ではバザーのお手伝いをしたり、また日本人会主催のイベントでは的当てや風船ヨーヨー釣りなどの遊び広場を日本人学校教員で開いたりするなど、現地のために、日本理解の促進のために日本人学校として協力を行ってきた。

イベントだけでなく、学校を運営する組織のサッカーチームや、日本人会のソフトボールチームに積極的に参加することで、日本人学校と現地日本人との結びつきをより固いものとする努力も行ってきた。

日本国大使館が行う日本語能力検定の試験官として協力することもその一つである。

4. さいごに

どの国においても日本人学校・補習授業校と日本人社会とのつながりは密である。私はカラカス日本人学校の前にも他の国での日本人学校の勤務経験があるが、カラカス日本人学校での日本人社会とのつながりはとても深いものだと感じた。それは、ほかの国に比べて学校の規模が小さいこと、現地の日本人社会が小さいということもあるだろう。小さいからこそ、そのつながりは強く、結果としてそのつながりがもたらす児童生徒への教育的な意義は大きいと感じた。

今後もカラカス日本人学校には、そのつながりを保ち続けてほしいし、他の在外教育施設においてもより積極的なつながりづくりを目指してほしいと願っている。